『専修大学社会科学研究所月報』は不滅です

研究参与　儀我　壮一郎

Ⅰ　『月報』の海外視察特集号のこと

恒例となった社研の２年に１回の春季海外視察は、次のような歩みです。『月報』は、毎回、特集号で視察と学術交流の成果を発表してきました。

①　1993 年：韓国（麻島昭一団長）。

②　1995 年：中国（北京、上海、麻島昭一団長）。

③　1997 年：ベトナム（ハノイ、ホーチミンなど、水川　侑団長）。

④　1999 年：中国（香港、深圳など、水川　侑団長）。

⑤　2001 年：中国（北京、大連、古川　純団長）。

⑥　2003 年：中国（雲南省麗江、昆明、古川　純団長）。

⑦　2005 年（予定）：中国（北京、柴田弘捷団長）。

幸いに、私は第１回から第６回まですべてに参加し、第７回にも参加の予定です。毎回、『月報』に、報告・雑感を発表してきたので、執筆者としての私の『月報』との関係は、この海外視察が中心です。顧みれば、父の儀我誠也（当時陸軍少佐）が、1928（昭和３）年６月３日から４日にかけて、軍事顧問として張作霖と同じ車輛に乗車していたため、４日未明の河本大作大佐を首謀者とする列車爆破のさいに九死に一生を得たという経過があります。その前に、家族は、父より一足先に奉天（現：瀋陽）に引きあげることとなり、私は、北京の日本人小学校から奉天の日本人小学に転校していました。翌 1929 年１月、父とともに帰国し、広島の済美小学校（後に原爆の爆心地）に転校しました。父は 1938 年１月、天津特務機関長在職中に急死、私は新潟県立高田中学校の五年生で、旧制四高の受験、入学の直前でした。このような経験もあるので、中国への海外視察には、特別な思い入れがあります。『月報』の各特別号の私の小論の底流に、このような「歴史的背景」があることを、今、まとめて「註記」させていただきたいと思います。

Ⅱ　なつかしい社研、なつかしい『月報』

私は、戦時中に東京帝国大学経済学部経済学科を 1943（昭和 18）年９月に卒業。演習（ゼミ）は大河内一男先生（当時助教授）に指導していただきました。氏原正治郎、塩田庄兵衛両君たちも同学年のゼミ生で、江口英一氏は先輩格でした。

敗戦後、東京帝国大学経済学部教授との兼任であった専修大学大河内一男学長（1946 年４月

専修大学経済学部長、1947 年 12 月学長、1949 年３月退任。後、学監）当時に、すでに「社会科学研究所」が存在していたというので、私は社研に対して特別の親近感をもち、1985 年から 89 年までは運営委員、90 年からは研究参与となるなどしながら、現在にいたりました。ちなみに、大河内学長は、1948 年６月、今村力三郎総長のもとで労働学院も作られました。歴代の社研所長である①大河内一男、②小林良正、③山田盛太郎（再建の指導者）、④小林義雄、⑤石渡貞雄、⑥江沢譲治、⑦大友福夫、⑧三輪芳郎、⑨麻島昭一、⑩泉武夫、⑪水川侑、⑫古川純、⑬柴田弘捷　各氏と事務局長、部長、運営委員をはじめ、多くの所員からの学問的刺激は、思い出せないほど多面的・多角的ですが、『月報』と『年報』を読めば、各所員の面影と鋭い論点が生き生きとよみがえります。

その『月報』がいよいよ 500 号を数えます。堂々たる快挙です。1963 年から 2005 年の現在にいたる 40 年以上の歴史的大転換期の日本と世界の理論と現実、また、所員の迫力に満ちた「自分史」ともいうべき「聞き取り」による特集号の内容のどちらも、同時代人である私を励ます不思議な力をもっています。毎号待ち遠しい『月報』のますますの充実と、理論的・現実的な指導的役割の発揮を、切望してやみません。